蛇に転生した男　～All For　You～

ヘビくんちゃん

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

君が明日　蛇となり
人を喰らい　始めるとして
人を喰らった　この口で
俺を愛すと　咆えたとして
俺は果して　今日と同じように
君を愛すと　言えるだろうか
赤に濡れた手が　俺に伸ばされたとして
その手を　取れるだろうか

君の隣に　前と同じようにいれるだろうか

目次

第一話　転生とかなんじゃそりゃ　1
第二話　僕は蛇や　13
第三話　虚化ヤバいんやけど　25

第一話　転生とかなんじゃそりゃ

転生。その意味は生まれ変わりである。死んだ後に新たな人としてこの世に生を受ける事を意味するその言葉。宗教によっては、転生を信じている者もいるが、誰もそれを証明する事は不可能だ。

誰が死後の現象を証明するというのか。そんな人がいれば、間違いなくノーベル賞ものである。

さて、そんな証明不可な無理難題を、俺は体験していた。

最後の記憶は、電車に轢かれた所で終了している。ブラック企業に就職して、日常と化した数時間残業が終わり、駅のホームに立っていたら立ちくらみを起こして、路線に真っ逆さま。それで電車に轢かれたはずである。

間違いなく、即死だったと思う。自分の体内から水が弾けるような、聞こえてはいけないような音がした後に俺の意識は落ちた。電車に轢かれたとしても、何とか一命を取り留めるような人間もいるけれど、あの時の俺は体はボロボロで生き残れるような状態ではなかった。

……なのだが、目が覚めたら、見知らぬ小屋で銀髪の子供になっていた。しかも、親

のような人の姿は見えず。
夢か何かかな？

あれから、２０年程が経過した。事故に遭ったが、運良く生き残っていて、俺の体は昏睡状態で夢でも見ているのかと思っていた。だが、流石に夢にしては長過ぎる。つまり、これは現実という線が濃厚だろう。
出来れば、これは夢でいて欲しかった。死んだという事を認めたくなかった。だが、これは現実だと認める他あるまい。電車に轢かれて死んだ事に関しては、本当に俺は馬鹿野郎としか言えない。未練しかない人生だった。何故、創作物でよく見かける転生主人公達は、あんな風にすぐに転生を受け入れる事が出来るのだろうか。永遠の謎でしかない。
色々と後悔とかはあるけれど、どれだけ後悔したとしても過去は変えられない。出来る限りは前を向いて生きていこう。暫くは後ろ向きになりそうだが。
新たな人生を歩む事になったけれど、色々とおかしい所がある。
まず、俺の体が殆ど成長していない。２０年も生きていれば、それなりに体は大きく

なるはずなのだが、今の俺の体は精々小学校高学年程しかない。あまり身長が変わらない人もいるが、それにしても成長しなさすぎである。

次に俺の顔。どこかで見たような気がする。どこかで見たような気がするのだが、思い出せなかった。あと少しで思い出せそうなのに、思い出せないというあのもどかしい感じ。だが、それも俺が今いる場所の名前を聞いて思い出せた。

俺が今いる場所の名前は「尸魂界」。その名前を聞いて、ピンときた。ここ、ＢＬＥＡＣＨの世界やん。俺の顔、子供の時の市丸ギンやん。

ＢＬＥＡＣＨとか市丸ギンについて知らない人の為に簡単に説明すると、ＢＬＥＡＣＨというのは、人気漫画の１つであり、完結した今でも人気のある作品である。なお、俺は途中までしか読んでいない。主人公とその仲間達が友達を助けに行く「破面編」の途中までしか読んでいない。その後も読みたかったのだが、就活やら何やらで忙しく、いざ就職したらブラック企業で漫画を読む気力すらなかった。完結したという話も聞いて、どうせだし最後まで読んでしまおうと思っていた時に事故死したのだ。

いつかは読もうと思っていたのでネタバレに関する情報は極力仕入れないようにしていたから、その後にどのように物語が展開したのかは全く分からない。

そして、市丸ギンというのは漫画の中に登場する人物の１人だ。実は黒幕の仲間でしたという事は知っているが、結果的にどうなったのかは全く知らない。生きているの

か、死んでいるのかすらも不明だ。それを知る前に俺は死んでしまったから。その後の事について知っているのは「１３ｋｍや」という発言がネタにされたという事ぐらいである。

まぁ、無駄に敵とか増やしたくないし、俺は黒幕の仲間になるつもりはない。そもそも、物語と関わる気がない。原作で登場したキャラクター達をこの目で見たいという欲はあるけれど、それ以上に誰かと真剣で戦うとか怖すぎる。誰かを斬る事も、誰かに斬られる事も絶対に嫌だ。

という事で、俺は平穏に過ごそうと思う。

俺が何故か市丸ギンになってから、大体３０年が経過した。その間に色々な事があった。興味本位で干し柿を作ってみたり、他にも幼女を拾ったりもした。干し柿は超美味しくて、俺の好物の１つとなった。最後の幼女拾った宣言は明らかな事案なのだが、これは訳がある。別に複雑な問題とかではない。

道端で倒れていたから、助けただけという簡単な理由だ。全身傷だらけだったが、俺には医学の心得なんてものはない為、傷を消毒して包帯を巻くぐらいしか出来なかった

が、何もしないよりはマシだろう。その後は、自分の家に帰ってもらうつもりだったのだが、いつの間にか俺の家に住み着いていた。

曰く、帰る家がないらしい。

そんなこんなで我が家の住人が増えた訳なんだが、その拾った幼女の名前を聞いた時、俺は驚愕した。それと同時に納得もした。その顔には何処かで見覚えがあるような気がしていたのだが、思い出せずに悶々としていたのだ。

その幼女の名前は「松本乱菊」。

もうね、俺、びっくり。松本乱菊という名の人物を知らない人の為に説明しておくと、ＢＬＥＡＣＨの登場人物の１人である。物語中で過去に同棲していたという事が明かされている。その時の俺は「おのれリア充め」とか思っていたのだが、その立場になってしまうとは。人生は何があるのか分からないものだ。

乱菊が家に住み着いてから、１０年程が経過した。最初は、女子と同棲するという経験が前世含めて一度も無かった為、色々と慣れなかったが、１０年もすれば流石に慣れてくる。それに乱菊は明るい性格をしており、独りで静かだった我が家が良い意味で一

気に騒がしくなった。誰かがすぐ近くにいてくれるのは、本当に嬉しい事なんだと初めて知った。

前世は、ちょっとした訳アリだった。家族はおらず、友人と言える人物は1人もいなかった筋金入りのコミュ障だった俺だ。

まぁ、つまりだ。乱菊は俺にとって、めっちゃ大切な人だ。これが家族愛なのか、友愛なのか、それとも恋愛感情的な何かなのかは未だに分からない。自慢にもならないが、そういったものを一切経験した事のない俺の鈍さは凄まじいの一言に尽きる。けど、乱菊が俺の中ではとても大切で、乱菊の隣が俺の居場所だと思えるのは確かだ。

……怠け癖が玉に瑕だが。最初は、その怠け癖をどうにかしようと思っていたのだが、諦めた。うん、あれは無理だ。

今日は、ちょっとした私用で家を空けていた。乱菊に留守番を頼んでいたのだが、猛烈に嫌な予感がした俺は、駆け足で我が家に向かっていた。こういう嫌な予感は当たって欲しい時に外れ、当たって欲しくない時に当たるという経験をしたのは俺だけじゃないはず。前にもこういう嫌な予感が当たった事はある。それは、前世で俺が死ぬ日の

朝。

要するに、こういう嫌な予感は馬鹿には出来ないというのを俺は身を以て知っている。

そして、その嫌な予感は現実となった。我が家があった場所にあるのは、家の残骸であろう瓦礫だけ。家なんてどうにも出来る。住人のいない家に住むでもいいし、金を稼いで家を建てるとか、どうにでも出来るのだ。そして、当たり前だが人に代えが効くなんていうのは有り得ない。

「乱菊ッ！　乱菊どこだ!?」

家の周辺を走り回っていると、家から少し離れた場所で倒れている傷だらけの乱菊を発見した。何故、傷だらけなのか。何故、家から離れた場所にいるのか。色々と疑問は尽きなかったが、乱菊は気絶しており、訳を聞く事は出来ない。

それに何故か、乱菊の何かが失われたような印象を受けた。長い間、一緒にいた俺だからこそ気付けたであろう違和感。尽きぬ疑問は後回しにして、乱菊を連れて風を凌げる場所に行く。ここらは治安が悪く、人が蒸発する事は日常茶飯事である。主のいない家もそこら中にある。

もしもの時の事を考えて、避難所として目を付けていた森の中にある小屋。そこに乱菊を運ぶ。前々から必要最低限の食料や家具、医療品などを運び込んでおいたのが功を

為し、最低限であるが、傷だらけの乱菊への処置が完了した。処置と言っても、傷口を消毒して、包帯を巻いただけなのだが、何もしないよりは遥かにマシだろう。

布団に乱菊を寝かせて、俺はその傍らに座る。

そして、考えるのは乱菊が誰に何故襲われたのかという事だ。ここは治安が悪いからという事だけで納得は出来てしまうが、それでも納得できない部分がある。それが乱菊から失われたものだ。あくまで推測になるが、奪われたものは乱菊の持つ霊力だろう。

尸魂界内に存在する人は2種類に分けられる。霊力を持つ者と持たない者だ。霊力というのは、まぁ特殊な力の事なのだが、霊力をどれだけ持っているかによって、その者の強さが変わる。ドラゴンボ○ルの気みたいなものだと思っていい。俺も乱菊もその霊力を持っている。霊圧というのもあり、それは対象の強さを調べるのに使える。同じくドラゴンボ○ルで例えると戦闘力のようなものだ。

それで乱菊から感じられる霊圧が何か物足りないように思える。

確証もないが、案外正しいのではないかと思える。じゃあ、誰が奪ったのかという話になるのだが、それについてはさっぱり分かりません。すぐにパッと思い付くのは、尸魂界編で黒幕だと判明した藍染惣右介だろうか。何故と問われても、単純に黒幕だからというだけなのだが。

霊力と思わしきものを奪われて乱菊が目覚めないのではないかという嫌な推測が頭

に思い浮かぶ。そんな事は無いと思いたいけど、俺はそこまで霊力や魂魄などに詳しい訳ではない。乱菊の重要な体の一部が奪われたようなものだ。影響が何もないというのは、逆にあり得ないだろう。

絶対にそんな事が起きませんようにと俺は願う事しか出来なかった。

意識が覚醒する。目を開けると、窓から朝日が差し込んでいた。あ、乱菊の様子を見てる間に寝落ちしてた。

「乱菊……？」

そして、視界に映るのは布団から起き上がり、こちらを不思議そうに眺める乱菊の姿。目覚めた乱菊の姿に、思わず彼女の名を呼んでしまう。

「どうしたのギン？　死人でも見つけたような顔をして？」

そんなピンポイントな顔があるのかよと言いたいけど、喉が震えるばかりで口から言葉が出ない。昨日は「乱菊が目覚めないのではないか」なんていう馬鹿みたいな想像をしてしまったせいか、目の前に乱菊が起きている光景が夢なのではと疑ってしまう。

現実かどうか調べる為に自分の頬を全力で抓ると普通に痛かった。どうやら、これは現実らしい。乱菊曰く、死人でも見つけたような顔をしている俺が、急に頬を抓るとい

う行動に乱菊に浮かんでいた戸惑いや疑問の顔は更に深くなる。
「本当にどうしたのギ――」
乱菊が何か喋っていたけれど、俺はその言葉を遮って乱菊を抱き締めていた。
「ちょっ!? 本当にどうしたのギン!? 何か変よ?」
「……もう少しこのまま……」
戸惑いの声を上げる乱菊にもう少しこのままでいてほしいとお願いする。乱菊の方は何が何なのかさっぱりの様子だったが、それでも何かを察してくれたのか、俺の背中に手を回してくれた。乱菊から感じる暖かさで安心する事が出来た。

思い出すだけで顔が噴火しそうになるぐらいには恥ずかしい出来事の翌日の夜。俺は、1人で我が家があった場所まで来ていた。庭に干してある干し柿が無事だったのは昨日確認していたから、それの回収と家の残骸の中からまだ使えそうなものがあったら持って帰る為である。
干し柿やまだ使えそうな家具とかを持てるだけ持って、森の中にある小屋に向かう。乱菊を襲った人が近くにいる可能性がある為、素人ながら気配を消して帰っていると、

誰かの話し声が聞こえた。ちょっとした興味で茂みで身を隠しながら、声がする場所まで移動する。

そこにいた人物の顔に思わず声が出そうになるが、何とか抑える。声を上げそうになった理由は簡単だ。知っている死神がそこにいたからだ。そこにいたのは藍染惣右介と死神と思わしき男達。

死神と思わしき男達の1人の手には桃色の何かがあった。それを見た瞬間、俺は直感した。

あの桃色の何かが乱菊から奪われた物であると。

今すぐあそこに飛び出して、乱菊が奪われた物を取り返したい。だが、そんな事をすれば一瞬で終わる。俺が死ぬという結果で。

俺がＢＬＥＡＣＨの漫画を読んでいたのは途中までだが、その途中までで藍染惣右介の強さは十二分に分かっている。そして、藍染を直で目にした瞬間、体の震えが収まらない。あれに敵対してはいけないと本能が警鐘を鳴らしている。

それはきっと恐怖なのだろう。自分とは次元の違う生物を目の当たりにした事による恐怖だ。だが、それ以上に大きな感情が俺の中にあった。

それは怒りだ。

乱菊から奪い取ったそれを我が物顔で扱っている事への怒りだ。乱菊を傷付けた事

への怒りだ。心地よかった乱菊との生活に手を出した事への怒りだ。

あぁ、認めるよ。俺は乱菊が好きだ。恋愛的な意味で好きだ。俺に笑顔をくれた彼女が好きなのだ。俺の好きな乱菊を傷付けたあいつらは絶対に許さない。

俺のこの手で絶対に後悔させてやる。そして、奪われた物を絶対に取り返すのだとこの瞬間、俺自身の魂に誓った。

第二話　僕は蛇や

藍染惣右介を発見した後、彼らに気付かれないように静かに家に帰った。既に日は暮れていて、辺りは真っ暗だった。

家の扉を開けると、乱菊は布団の中で寝ていた。相変わらずの寝相の酷さに少し笑ってしまった。寝ている間に吹き飛ばしたであろう掛け布団を起こさぬように優しくかける。

寝相が酷かったり、涎を垂らして寝ている乱菊の姿を見て、何故、こんな彼女を好きになってしまったのだろうかと思ってしまう。いや、違うか。こんな彼女だから好きになったのかもしれない。これもこれで乱菊の魅力の1つなのかもしれない。

……ごめん嘘。もう少しでいいから、慎みというか、そういうのを気にして欲しい。

寝ている乱菊の頭を優しく撫でる。きっとこの先、俺の手は血に濡れるだろうから、この手で乱菊を触るのはこれで最後になるかもしれない。

藍染に奪われた乱菊の物を取り返す為には、原作の市丸ギンのように藍染の仲間になる必要がある。そして、本人の口から聞き出すしかないのだ。【鏡花水月】の攻略法を。

【鏡花水月】というのは、藍染が持つ斬魄刀の銘である。斬魄刀というのは、特殊

な能力を宿す刀の事であり、持ち手によって発現する能力は異なる。藍染が持つ斬魄刀の能力は完全催眠。ある条件を満たす事によって、何時如何なる時でも対象の五感や霊感を自由に操る催眠能力だ。ある条件というのも容易に満たす事の出来るものであり、作中に登場する能力の中でもその凶悪さは抜きん出ている。しかも、藍染自身の戦闘能力も同じ隊長格を瞬殺するレベルでヤバい。

だが、メタ的な事を言ってしまえば、ＢＬＥＡＣＨは漫画である。作品に登場する完全無欠の能力に見えるそれでも、何かしらの抜け道がある事が殆どだ。例に漏れず【鏡花水月】もそれがある可能性はある。そう仮定すると、【鏡花水月】の抜け道を聞き出すには、藍染の口から直接引き出す必要がある。

……もし、弱点とかなかったら終わるんだけど。

そういう訳で俺は藍染の仲間になる事にした。まぁ、とりあえずは藍染に俺の有用性とかを見せて、仲間にさせてもらう必要がある。どうやって、藍染に俺の存在を見出してもらうか。賭けの要素が大きいが、真央霊術院で優秀な成績を残して、俺が使えるという事を証明するしかないだろう。真央霊術院というのは、死神を育成する学校の事だ。

賭けというのは、俺が藍染に興味を持たれなければ、そこで終了だという事だ。藍染の仲間になる事も出来ず、【鏡花水月】の弱点も聞けず、乱菊が奪われた物も取り返せな

い。

ま、頑張るしかないか。努力が必ず報われるというのはありえないけど、そもそも努力しなければ報われる可能性すらもないのだから。

「おやすみ、乱菊」

乱菊が襲われてから1年程が経過しました。時間飛びすぎだろって？　全くもってその通りでございます。許してください。

だが、特筆すべきような出来事が無かっただけだ。俺がこの1年間でやった事と言えば、乱菊に隠れて真央霊術院に入って飛び級しまくって本当は6年かかる所を1年で卒業したというだけだ。あと、藍染の御眼鏡には適ったようで今日の夜に五番隊三席との殺し合いをさせられる予定である。あと卍解も習得した。

あれ、結構重要な事ばっかりだったか？

「主は1人で何を考えているのだ……」

目の前には、呆れた様子の黒髪黒目の袴姿のショタがいた。誰あろう、シン君である。

「シン君言うな。儂には、【神鎗】というちゃんとした銘がある」

見た目はマジのショタなのに、口調は爺のそれである。ショタジジイというのは、一部の人の性癖には刺さるのだろうが、俺には全く刺さらない。残念だったな。目の前のショタジジイは、自分の事を【神鎗】と言っているが、それはちゃんとした正式な名前で間違いない。キラキラネームを付けられた子供とかいう訳ではない。目の前のショタジジイは、俺の斬魄刀である【神鎗】の姿である。ここは精神世界で、その中で【神鎗】と話をしているのだ。

俺の斬魄刀の為か、俺の考えている事は全てお見通しであり、プライバシーもへったくれもない。俺が女性で、斬魄刀の中身が男だった場合、セクハラとかで訴える事が出来るのではないだろうか。斬魄刀を訴えるというのも、それはそれでヤバい人でしかないのだが。

「それにしても、随分と余裕だな。これから主は殺し合いをするというのに」

……大丈夫だ、問題ない。

「……本音は？」

「ごめんなさい嘘です。めちゃくちゃ怖いです」

無言の圧力というのは、目に見えぬ力を持っているに違いない。即行で前言撤回する事になった。てか、俺の心が筒抜けなんだから、嘘か本当かなんて、聞かずとも分かるだろうに。

自分の手を見てみれば、微かに震えている。それに声も若干上擦っている。真央霊術院で虚の退治ぐらいは何度もした事はあるが、同じ死神と殺し合いをした事なぞ一度もある訳がない。そして、今回の戦いで完全な悪はこっちで、むしろ相手は被害者だ。その被害者を俺を殺す事になる。

いやぁ、普通に怖い。前世では平和な日本に住んでいた俺が、真剣で誰かを殺す事に恐怖を覚えないようなサイコパスになった覚えは無い。乱菊の為とかいう言葉を免罪符にする程、俺はクズじゃないつもりだ。まぁ、まともな人だったら、そもそも復讐なぞしないのだろうが。

これから死神を殺すのは俺の意思なのだから。好きなだけ恨んでくれても構わないとは思っている。それでも、俺には為さなければいけない事がある。藍染惣右介は手段を選んでいられる余裕があるような敵ではないというのは漫画を読んでいても分かっていたし、実際に会ってみてもよく分かった。

藍染への復讐。乱菊の奪われた物を取り返す。それが俺のやらねばならない事。その後は、出来れば乱菊とのんびり暮らしたいなぁ。

無理だろうけど。

深呼吸をして、覚悟を決める。こんな時が来るであろう事は分かっていたから、覚悟は1年前にしていた。頭の中で乱菊の顔を思い浮かべてみれば、何故か安心できた。再

び手を見れば、震えは止まっていた。

さて、行くか。

「市丸ギン、準備はいいかい？」

目の前には藍染がいる。周囲は夜の森に囲まれ、他者の気配は感じない。ここにいるのは、俺と藍染だけ。今すぐに剣を抜いて斬りかかりたいが、黒い感情は俺の心の奥底に隠す。これを外に出すのは、その時が来てからだ。藍染を殺すのは、まだ早い。今この段階で藍染に俺の本当の目的を知られるのは流石にまずい。藍染を殺すその時まで己を偽れ。

僕は蛇。冷静に、冷徹に、冷酷に、舌先で獲物探して這いまわって、その時が来たら獲物を丸呑みにする。そういう生き物や。

「もう間もなく、ここに五番隊第三席が来て、君を殺そうとするだろう。君がやる事は、三席を殺す事だけだ。今は他に何も考えなくていい。三席程度に圧勝できないような

ら、僕が君を殺すから、そのつもりでいてくれ」
不敵で不気味な笑みを浮かべて、無理難題をおっしゃる藍染副隊長。
「圧勝？　僕、ついこの前に霊術院を卒業したばっかりですよ？」
三席というのは、その隊の中で3番目に偉い人である。それに見合うだけの実力もあるという事だろう。対して、僕はつい最近に卒業したばかり。それなのに、三席に勝てと言う。しかも、圧勝という条件付きで。出来なければ、藍染副隊長に僕が殺される。いやぁ、鬼畜やわ。
「なに、君なら出来るさ。そら、来るよ」
謎の信頼の言葉を聞きながら、何者かの霊圧が近付いて来るのがよう分かる。霊圧を感じる限り、僕の敵ではなさそうやけど。初見殺しの斬魄刀とか持ってたら、ちょっと困るんやけど。ま、なるようになるやろ。
森の奥から1人に死神が現れた。黒色の死覇装に身を包み、腰には斬魄刀を掛けている一般的な見た目の死神や。相対して感じられる霊圧では、さして問題はあるように思えへん。藍染副隊長みたいに化け物みたいな霊圧を隠してるとかだったら、流石に僕泣くけど。
「藍染副隊長。こいつですか!?　平子隊長の命を狙っているという輩は！」
まるで親の仇でも見るような目でこちらを睨んでくる三席さん。ほんま怖いわぁ。

おっかないなぁ。

「そうです、朝霧(あさぎり)三席！　僕は応援を呼んでくるので少しの間だけでいいので持ち堪えてください！」

藍染副隊長に色々と吹き込まれて、僕という悪者を殺そうとしてくる三席さん。藍染副隊長によると、色々と仕込んで、僕が隊長を狙う敵と思わせるように仕組んだらしい。どうやったのかは想像はつかないが、藍染副隊長なら出来そうやなと納得してしまいますわ。

僕が悪者という事に間違いはないのだが、もっと悪者の黒幕がそこにいるんやけどね。黒幕の藍染副隊長は、先程までの悪者の笑みを消して、切羽詰まったような演技をしている。その演技力たるや、藍染副隊長が黒幕だと知っている僕から見ても、驚愕の一言である。

藍染副隊長の変わり様に少なからず驚いていると、藍染副隊長は何処かに行ってしまった。どうせ、これから起こる戦いを見ているんやろうな。下手な戦いをすれば、文字通り斬り捨てられかねない。

「護廷に弓引く反逆者め！　貴様は、この朝霧天翔(あさぎりてんしょう)が成敗してくれる！」

そう宣言した三席さんは、腰に差してあった斬魄刀を抜き去る。抜いた刀の鍔の形が三角形になっとる。【浅打】の鍔は四角形であるから、恐らく始解は出来るんやろな。流

石に卍解は出来へんやろけど。

「〝吹き荒れろ〟【鎌鼬（かまいたち）】！」

やっぱり。解号と共にその刀に変化が訪れる。刀身の見た目はそれ程変わっていないが、確実に変化はあった。その刀から風が吹いている時のような音がしている。目には見えないが、刀の周囲で風が発生しているのだろう。解号や斬魄刀の名前的に風に関系する能力なのは明らかや。

さて、どうしたもんやろ。相手の出方を見るか、それともこちらから仕掛けるか。僕の斬魄刀を考えれば、こちらから一気に仕掛けた方がいいのかもしれへんけど、藍染副隊長は「圧勝」と言うた。となると、相手の攻撃を真正面から受け止め、相手を潰すのが正解なんやろか。藍染副隊長の考え方は、僕と異次元過ぎて、よう分からんわ。

とりあえず、真っ向から潰す方針で行くのが正解やろ、多分。間違ってたら、その時は死ぬ時や。

僕の方も斬魄刀を抜いて、構える。

「子供だからと言って容赦はしない！　藍染副隊長の敵は俺の敵だ！　食らえ！【風切（かざきり）】！」

そう言う三席さんの言葉には、狂信とも取れる程の藍染副隊長への信頼が見えた。藍染副隊長の人心掌握の凄さがよう分かるわ。怖すぎ。

三席さんがその場で刀を振るうと、風の音がした。何か仕掛けてきたのは分かってるし、とりあえず避けてみようか。瞬歩でその場から離れると、僕が元いた場所の近くにあった木の幹に刃で切り刻まれたような跡が出来ていた。つまり、【風切】というのは風の刃を飛ばす技と考えてよそうや。

「まだまだぁ！　【風切】！　【風切】！　【風切】！　【風切】ィィイイ！」

何度も何度も風の刃を飛ばしてくるが、その全てを瞬歩で避ける。僕の瞬歩に目が追い付いていないようで、風の刃が僕に掠りもしない。僕が瞬歩で消えて現れて、風の刃が飛んできて、それを避けるだけ。その繰り返しである。ホントにそれを繰り返すばかり。

もう少し他の技は無いのだろうか。いや、始解が出来るだけで死神の中でもエリートの方ではあるんだよ。始解が出来ない死神の方が数は圧倒的に多いし。それでも藍染副隊長が僕にけしかけるぐらいだから、もう少し何かあるのではないかと疑っていたんだけど。

この分だと、何も無さそうやな。

終わりにしよか。

瞬歩を使って、一瞬で三席さんの背後を取る。

そして、お別れの言葉を口にする。

「ほな、さよなら」

ー〝射殺せ〟【神鎗】ー

僕の足元には頭に穴を開けた元三席さんが倒れとる。頭に開いた穴は、僕の刀で開けた穴や。僕の斬魄刀【神鎗】の能力は、刀身がめっちゃ速く伸びるという単純なものや。けど、単純だからこそ強い。僕にとって、相手との間合いはないようなものだし、奇襲もやり易い。

「期待以上の腕だったよ、市丸ギン。うちの三席はどうだった?」

藍染副隊長が現れて、そう言ってくれはった。どうやら、あんな感じで良かったようや。良かった良かった。それにしても、これが三席か……

「全然あかんわ。話にすらならん」

その強さは正直拍子抜けするレベルだった。僕がやった事は、瞬歩で攻撃躱して、後ろから頭貫いただけやし。始解すらする必要が無かった気がする。一応、藍染副隊長がいたから、有用性をその目で見てもらう為に始解はしたけどや。

表では何でもないように振る舞っているが、裏では吐きそうな程に気持ち悪かった。人の頭蓋骨を砕き、脳を貫いた感触が腕にこびりついて離れないや。初めて人を殺したという罪悪感が僕の心を圧し潰す。きっと、この先はこんな事を何度も繰り返すんやろう。

それでも僕は、俺は止まる訳にはいかない。

俺には果たすべき目的があるのだから。

第三話　虚化ヤバいんやけど

第三席を殺した後、僕は東仙さんと出会った。それと同時にこの世界の、尸魂界が罪の上に出来た世界だという事を知った。

東仙さんは、僕が出会うよりも前から藍染副隊長の部下として動いていたらしい。部下になったのは１００年以上前だと言っていた。僕の大先輩や。

東仙さんは藍染副隊長に心の底から忠誠を誓っているのだと出会って数秒で理解出来た。

初めて言葉を交わした時の第一印象は、正義に拘る男といった感じやろか。どうして、そんな正義に拘る男が藍染副隊長みたいな人に従うのかよく分からん。

藍染副隊長が悪なのかと聞かれると、迷う所ではあるが、そこに正義があるのかと聞かれれば、それはないと断言していいやろう。

きっと過去に色々とあったのだろうが、そこに触れるにはもう少し時間を置くべきやろう。初対面の人が他人の心にバリバリ踏み込んでいくのは、あまり良くはない。

その方が仲が深めやすい人もいるのかもしれないが、少なくとも東仙さんはそれには該当しないだろう。踏み込み過ぎて、斬られるとかありそうでおっかないんや。

そういえば、東仙さんにある事を聞かれた。

「お前の正義はどこにある？」

そないな事を聞かれた。果たして、藍染副隊長に従い、藍染副隊長を騙し、多くの人を殺めるであろう僕の正義は果たして何なんやろか。そもそも、僕に正義なんてものがあるんやろうか。

世間一般的に言えば、人に賞賛されたりするようなものが正義で、非難されるものが悪なのかもしれない。

けど、正義と悪は人それぞれによって違うもんだと僕は思うねん。それは誰かにとっての正義であったとしても、他者にとっての悪となりうる。

正義とは、己の信念に従う事。悪とは、己の信念に反する事だと僕は思っている。信念は人それぞれで違うのだから、受け入れられない正義があるのが普通なんや。

きっと、僕の信念は、僕だけの正義は……

僕の答えを言ったら、東仙さんは「私のようにはなるな」とだけ言っていた。その時の東仙さんは、哀愁が漂っていて、過去に何かあったように感じられたんが、そこは突っ込まないでおいた。まだ、そこに突っ込むには付き合いが短過ぎると思うからや。

色々とあったが、こうして、僕は藍染副隊長の部下になったんや。

藍染副隊長の部下になってから、色々とやってきた。崩玉というおっかない物に尸魂界の住人の魂を与えたり、悪事と言われるような事に手を染めてきた。藍染副隊長が行う色々な実験で幾多もの死神や流魂街の住民を殺している。

その行いに心の痛みや罪悪感を感じていないと言ったら、嘘になるやろう。けど、そういう事に慣れてしまった僕が確かにいた。

最初の時は正直吐きそうだった。それを藍染に悟られるのはマズイ気がして、必死に心を偽った。そんな事を暫くしている内に、いつの間にか心が軋む事は少なくなったんや。

他者の命が失われても何も感じない人でなしの心と、誰かの命が失われる事で何かを感じる普通の心。どちらが僕の本当の心なのか、分からなくなってきていた。けど、これだけは言える。

藍染に復讐したい。乱菊が傷付く事なく、泣く事もない世界を作りたい。そう思うのは、絶対に僕だけの心なんやと。

藍染副隊長は、とある実験を行っている。それは「虚化（ホロウか）」の実験だ。虚化とは、ざっくり言ってしまえば、僕や藍染副隊長みたいな死神を更に進化させる現象だ。死神の敵である虚の力を手に入れる事で更なる力を手に入れようという試みである。

そんな簡単に虚の力を手に入れる事は出来ず、別次元の頭脳を持つ藍染副隊長でさえ、長い試行錯誤の時を経て、ようやく実験段階になるという代物である。

僕が覚えている原作知識では、虚化を獲得しているのは、大体１０人ほどだった気がする。たしか、主人公とヴァイなんとかとかいう集団が虚化を獲得していた気がする。自信はあまりないが、たしか合っていた気がするやけど、どうだったかな。

昔の事過ぎて、記憶が曖昧なんや。堪忍してくれや。

まぁ、それでなんで虚化の話をしたかというと、藍染副隊長が虚化の実験をしている最中だからや。そもそも虚化という存在自体を忘れていたが、藍染副隊長から虚化について聞いて思い出したんやけどな。

それでどうして、虚化の話をするのかというと、藍染副隊長への復讐の手札の１つにする為や。僕の【神鎗】の能力は、騙し打ちや奇襲に秀でている。刀身を伸ばせるのもそうだし、大体の死神も１撃で殺せるような能力も持っている。

だが、それだけで藍染副隊長は殺せない。僕の見ている藍染副隊長が、【鏡花水月】によって見せられている幻であるという可能性が常に付き纏うからだ。失敗は絶対に出

来ない。

だから、僕が復讐を実行するのは、藍染副隊長の【鏡花水月】の弱点を聞き出した後だけや。

けど、それだけじゃ足りない気がしてならないんや。相手は、あの藍染副隊長や。原作を読み、ＢＬＥＡＣＨの世界で実際に会ったからこそ分かるが、あれは真性の怪物。それを殺す為に手札は１つだけでも多い方がいいに決まっとる。

故に、虚化で僕自身を強化しようと思っている。正直、藍染副隊長に真正面から戦って勝てるビジョンが全く浮かばないが、それでも手札を少しでも多く持っている分には、悪くないだろう。で、問題は、どうやって僕を虚化を獲得しようかという事なんやけど。

はてさて、ホントにどないしよ。

今日は、前々から藍染副隊長からお達しの来ていた虚化の大規模実験の日や。今までも虚化の実験は行っていたんやけど、その対象となった流魂街の住民や一般の死神では虚化に魂魄が耐え切れずに消滅していたんや。

そこで藍染副隊長は、そこらにいる死神とは一線を画す隊長や副隊長たちを実験隊長に選んだ。

その中には、藍染副隊長の直属の上司である平子隊長まで含まれている。平子隊長を含めた実験対象になってしまった死神たちの顔を見て思い出したんやけど、その人達がヴァイなんちゃらっていう集団やった。虚化を使えるのも、藍染副隊長の実験台にされたからなんやなと1人で勝手に納得していた。

既に六車隊長、久南副隊長、2人の虚化には成功している。失敗続きの実験だったせいか、成功例を見ただけで感動してしまったんやけど。

今現在は、その虚化した隊長、副隊長とまだ虚化していない隊長や副隊長が戦っている所を観戦している所や。実際に虚化に成功したのが初めてなので、虚化によってどれだけ強化されたのかの観察中なのである。

藍染副隊長の【鏡花水月】で僕や東仙さん、藍染副隊長の霊圧や姿、全てを他者に感じ取れないようにしてもらっている。どれだけ藍染副隊長の【鏡花水月】が脅威なのか、身をもって体験している。

それにしても、ホントに虚化というのは凄まじいものや。虚化した副隊長が不意打ちとはいえ、隊長の1人を1撃で行動不能にしてしまったり、虚化した隊長に至っては、複数人の隊長、副隊長を相手取って戦っている。

これがもしも、藍染副隊長の身に起こったらと考えると怖すぎやろ。そんなおっかないものに勝てる人なんているんやろか。総隊長でさえ、片腕で捻り潰す怪物の誕生やろな。

でも、だからこそ、是非とも手に入れたい。その虚化を。けど、理性を失うような虚化は有り得へん。それのせいで、乱菊を傷付けたりしたら本末転倒もいいところ。論外としか言いようがない。

虚の力の手の入れ方は、もう少し慎重に、ゆっくりと考える方がいいだろう。

あ、虚化していた隊長と副隊長が無力化された。それと同時に猿柿（さるがき）副隊長が虚化して、近くにいた平子隊長が重傷を負ってしまう。

あ、藍染副隊長が東仙さんにゴーサインを出した。平子隊長以外の全員を、東仙さんが卍解を使って斬り付けていた。藍染副隊長には、1人2人程度の欠損ぐらいは許可されているが、極力殺さないように言われている。

続いて、東仙さんは平子隊長と刃を交わすが、そこは流石は平子隊長とでも言うべきか。虚化に抗っている事で体力を大幅に削られているにも関わらず、東仙さんとの戦いは平子隊長の方が分がありそうだ。

だが……

「があっ!?」

平子隊長の虚化が更に進み始めた。目の焦点は合わず、既に意識を保つのに精一杯なのだろう。フラフラとしており、虚化するのにはそれほど時間が掛からないであろうことは、容易に想像できる。

「最後に覚えておくといい」

藍染副隊長が自ら刀を抜く。ここらでこの場での虚化の実験を一段落させるつもりなのだろう。

「目に見える裏切りなど、たかが知れている。本当に恐ろしいのは目に見えない裏切りですよ、平子隊長。あなた達は素晴らしい実験材料だった」

その刃を平子隊長に向けて振り下ろそうとした時、何者かの刃が藍染副隊長に振るわれる。一応、藍染副隊長からの信頼度を少しでも上げておくためにアピールぐらいしておくか。信頼度を少しでも上げておいた方が【鏡花水月】の弱点を教えてくれるかもしれないし。

謎の男と藍染副隊長の間に瞬歩で割り込み、振るわれた刃を神鎗で弾く。追撃でその謎の人物に向けて、普通の突きを繰り出すが避けられてしまった。

「おや、これは面白いお客様だ」

謎の人物が雲の合間から差す月光によって照らされる。全身を黒い外套で覆い、フードも被っているが、フードの隙間から見える髪や、月光により照らされたフードの下に

ある顔には見覚えがある。その隣に立つ大男も見た事はある。

「何の御用ですか、浦原隊長、握菱大鬼道長」

黒い外套を纏った人物は、十二番隊隊長の浦原喜助。藍染副隊長が自分と同等以上の頭脳を持つと評している男であり、護廷十三隊の中で最も評価し、警戒している人物でもある。その隣にいるのは、握菱鬼道長。まぁ、要はめちゃくちゃ鬼道を使うのが上手い人である。

虚化の実験を見られた事で、東仙さんが刀を抜き、浦原隊長達に刃を向けようとする。

「いや、いいよ」

藍染副隊長は静止の言葉を掛ける。だが、それでも東仙さんは刀から手を離さない。確かにこの実験を見られたからには、ただで帰す訳にいかないというのも分かる。これがもしも護廷に知れ渡り、護廷十三隊全てを相手にするとなったら、流石の藍染副隊長もヤバいやろうし。

「要、僕はいいと言ったよ?」

「はっ！　戦場の物言い、お許しくださいッ！」

藍染副隊長の目が東仙さんに向けられる。僕に向けられた訳でもないのに、冷や汗が止まらん。その視線を受け、跪いた東仙さんの冷や汗はもっと凄い事になっている。盲目の人に眼力だけで冷や汗を滝のように流させるとか、ホントおっかないわ。

「藍染副隊長。ここで何を？」
浦原隊長が藍染副隊長に問いかける。ほぼ僕達が犯人であろうと確信していながらも問いかける。この現場を見て、僕達が犯人じゃないとか思ってたら、それはそれでヤバすぎるんやけど。
「なにも？　御覧の通り、偶然にも戦闘で負傷した魂魄消失案件始末特務部隊の人々を発見し、救助を試みていただけの事です」
藍染副隊長は白を切るつもりらしい。きっと、藍染副隊長には藍染副隊長なりの考えがあるんやろうし、僕は何も口を挟む事は無い。
「戦闘で負傷した？　これが負傷？　嘘を言っちゃいけない。これは虚化です」
そこから答え合わせの時間が始まった。魂魄消失案件が虚化の実験の結果である事。その犯人が藍染副隊長を含む僕らである事。
かつて、藍染副隊長は言っていた。浦原隊長は、自分と同じように虚化による死神の進化に目を付けた男であると。藍染副隊長1人を相手に己を偽って、機を伺っているというのに、藍染副隊長並みの頭脳を持つ男が僕の新しい敵になるとか勘弁してほしいわ。
「今夜ここに来てくれて良かった。目的は達した。行くよ、ギン、要」
藍染副隊長は、刃を鞘に収め、浦原隊長達に背を向けて歩き出す。【鏡花水月】で僕達

の姿を見れなくしたり、霊圧を感じれないようにして逃げるのだろうか。まぁ、藍染副隊長に付いて行けば、この場は容易に切り抜けられるだろう。

「〝破道の八十八〟【飛竜撃賊震天雷炮（ひりゅうげきぞくしんてんらいほう）】」

後ろから大鬼道長の放つ八十番台の強力な破道が迫る。まぁ、藍染副隊長が何とかするやろ……

「ギン」

どうやら、僕に防げという事らしい。あの程度の鬼道ぐらい、自分の労力を割くまでもないという事だろうか。藍染副隊長1人だけだったら、直撃したとしても、煙の中から無傷で出てくる藍染副隊長という光景が容易に脳裏に浮かんだ。

「〝縛道の八十一〟【断空】」

轟音が森の中に響き渡る。だが、【断空】によって阻まれたそれは、僕達には届き得な

かった。